

房総の森シリーズ

照葉樹林 タブノキ林

海岸と房総山脈最高の標高 300m前後の尾根に出現

樹木医 藤平量郎

房総半島が西南日本からの暖温帯の東端に位置し、それ故ここの自然林は照葉樹林であることはよく知られている。その照葉樹林も一様ではなく、標高によって微妙に変化する。ではその森を最も標高の低い海岸から見てみよう。

陸と海の境の汀線は、絶えず波の脅威に曝されるので植物は生えられない。その脅威から免れた所から植物群落は始まるが、海岸は風が強く、砂丘はよく動くので、その環境に適した砂丘植物、即ち風に飛ばされないように根を深く張り、急速に表面を被覆する匍匐型、叢生型の生活形をとる植物が多くなる。例えばハマヒルガオ、コウボウムギ、コウボウシバなどである。それに海岸植物の葉は水分を失わないようにクチクラ（蠟状の物質）を発達させるので葉は厚く艶がある。ノイバラの海岸型はテリハノイバラと艶のある葉の野バラに変わる。艶のある葉といえばヤブツバキを代表とする照葉樹に連想がゆく。照葉樹林が雲南や東南アジアから日本に伝播するのに海を渡らなければ来られない。日本の常緑広葉樹（特にヤブツバキ）をみた欧米の学者が、照葉樹林と言い出したのであるが、海を越え日本に到達する過程で照葉樹林らしくクチクラが発達したのではないだろうかと思われ、連想が広がる。それはともかく海岸植物群落の後にマサキ・トベラ群集と呼ばれる低木林が立ち上がり、更にその後の海風の影響の軽減した所にタブノキを主とし、ヤブニ

ッケイ、ヤブツバキなどの混じるタブノキ林が現れる（人里にある照葉樹林として身近に見られる鎮守の森の優占種であるスタジイは海岸の森には殆ど見られない。これはスタジイが海水の飛沫に弱いと説明される）。

海岸にある草本の植物群落からタブノキ林までの連続した群落の典型を簡単に見られる場合は、館山の沖ノ島である。島とあるが、今は陸続きで、館山の航空自衛隊の飛行場脇を廻って行くと到達出来る。が太平洋戦争中軍隊が駐屯し、荒れたためタブノキ林としては、一部を除き十分に成熟したものと言えない。

タブノキの自然林として胸高直径 1m以上のものがあり、南国らしいテイカカズラ、フウトウカズラの蔓が垂れ茂るジャングル状の迫力のある成熟した林は浮島の上部平坦地にある森で見られた。ただバブルの頃開発の話があり、以前の姿を保っているかは不明。

もう 1 つのタブノキ極相林として知られるのは銚子市の渡海神社の森である。この森は海に近いが台地の上にあるので、自然度の高い森であるが、海の近い沖ノ島、海の中の浮島と違ってスタジイもかなり含むタブノキ林である。長柄町の、成熟したタブノキの林のあることで知られた権現の森はスタジイの大木も混在していることで似ている。

タブノキ林は林床にイノデが見られタブ・イノデ群集と言われる。このようにタブノキ林は海岸に多く垂直分布で 0mからの最下位の所に書かれていた。ところが大沢雅彦氏の「千葉県極相林で優占する種の分布北限線」(1975)を見るとタブノキが最



も北に位置するのである。最も北に見られるとは最も低温に耐え、垂直分布で上部の筈が最も下にあることに、疑問と違和感を覚えた。

その後、君津市史自然編のための調査で、太平洋を望む君津市・鴨川市境尾根、標高300m以上の所に2箇所タブノキ林を発見した。この時は太平洋の影響が市境の尾根にまで及ぶのかと考えたが、更に1987年に鹿野山の九十九谷を望む垂直に近い崖の上(天崖)でもタブノキが多いことを発見した。そこは海の影響は全くないが、この地形では南からの上昇気流が吹き上げる。同じく鹿野山の山頂台地の西南側にもタブノキ林を発見し、ここも西南、東京湾側からの上昇気流が吹き上げる場であることを確認。北からの寒気団に会って露を発生し易いことに気付く。

そこに、田川日出夫氏(1979)の「梅雨末に落下したタブノキの種子が、発芽した所で雨季が終わり、落葉に邪魔されて幼根が土の到達出来ず枯れた」例を述べられた論文が眼に入る。上記の上昇気流の尾根の

場は同時に北からの冷たい気団との出合いの場で霧、露を他より発生しやすく、その露がタブノキの根の定着を助けるのではないかとの推論に到達した。そこで南に対して切り立った崖を持つ尾根の山を探し、若しその山にタブノキ林が発見されたら仮説は証明されたと考えた。地図で探した結果、鋸山が上総と安房の境に東西に壁のように屹立し、両者からの気団の接触し得る典型的な場と見られた。鋸山は標高329m、西側の日本寺境内は房総有数の観光地であるが、本峰の方へ登る人は当時殆どなく、私も初めてであった。保田側の林道金谷元谷線から尾根に入り、山頂に近づく時は大げさに言うと入試の合格発表を見に行く気分であった。そして山頂に純林に近いタブノキ林が現れた時、期待していたとはいえ不思議な感慨に捕われた。ただし予想が当たったことと、実際にタブノキの種子が発芽する7月上旬の梅雨が終わり猛暑が来る時の、ここの土の水分が多いかどうかは別のことなので、確認が必要である。幸運にもその年(1997)の6月28日台風経過後、運よく快晴で猛暑が続いた。その6日後の7月4日午後5時40分から6時30分に続きの尾根の標高約150mのスダジイ林、同250mのヤブニッケイ林、と同325mのタブノキ林では2箇所土を採集し水分量を測定した。晴天は更に続いたので、5日に坂戸神社スダジイ林(30m)、6日鹿野山(天崖)(330m)、9日君津・鴨川市境2カ所タブノキ林(300m)、大福山スダジイ林(280m)の土も採集。〔注:()内数字は標高〕。調査は、採集当日すぐ重量測定、十分風乾後再び重量を測定し、その差を水分量とした。結果は表に示す。

表 水分割合の調査結果

場所	林種	水分率
鋸山	スダジイ林	17.3%
	ヤブニッケイ林	30.0%
	タブノキ林	33.8%
		36.5%
坂戸神社の森	スダジイ林	32.4%
鹿野山天崖	タブノキ林	38.4%
君津・鴨川市境	タブノキ林	32.6%
		35.8%
大福山	スダジイ林	25.0%

以上のようにスダジイ林の土壌に対して、タブノキ林のそれの方が湿性であった。特に11日も晴天が続いた9日夕のタブノキ林の土も湿っていた。坂戸神社の森のスダジイ林がスダジイ林として例外的に水分が多い値が出たが、ここだけノボ土であった。一方タブノキ林はこれ以上であるし、それに鋸山のその林床には凹地にモミジガサ、サラシナショウマ等の湿性の植物が見られたのに、坂戸神社のスダジイ林では湿性の植物は見られない。

また同時に種子の発芽と水分の関係を知らするための発芽試験を行った。詳しい記述は避けるが、果実のまま播いた時、自然降雨

に任せた場合は発芽ゼロであったが、灌水は僅かであっても、充分であっても効果は同じで発芽はあった。しかし鳥の消化管を通った場合を想定して、果実を乱暴に攪拌して果肉を取って植えた場合、自然でも発芽したが、灌水をした場合に上と同じ傾向で自然の場合と明らかに差がつ



(山頂部のタブノキ林)

き、発芽率は果実のまま植えた時の6~15倍であった。

以上のように、房総のタブノキ林は海岸に見られるが、房総丘陵の平野に望む急斜面の最上部、山頂、または山頂裏側北斜面(標高300m前後以上)にも分布する。この後者の林に現れる植物群はシロダモ、ヤブニッケイ、アオキ、イヌビワ、ジャノヒゲ、キズタ、ヤブコウジ、フユイチゴ、キチジョウソウ、オオバジャノヒゲなど鳥伝播の種が高い頻度で見られ、タブノキを含めこの林の構成種は鳥により入ってきたと言える。またこの林は前述の地形的条件が霧、露の発生を促し、土壌を潤し、そのことがタブノキの発芽を助けたと考えられる。そしてこの標高300m前後は温度条件がスダジイの生育限界に近く、このことがスダジイとの競争に、また風の強いことがカシ類との競争でタブノキに有利に働いてこの林が成立したと考えられる。私はこの林を成立過程から房総の雲霧林といえるのではと思っている。